



ミコトのほかは旅になれているスクネ、イワオ、アカネという屈強な若者たちが、おれたちを、村まで送っていつてくれることがきまった。

ミコトは弓を射ることにかけては村でいちばんうまい。スクネはホコ突きがうまく、それに「海辺の村」など遠くの土地へなんでもいって、旅によくなれていることがなによりの強みだし、イワオはものすごい力もちで、力くらべでは、村のだれもイワオにかなうものがない。いちど、裏山で大きな熊とたたかって、もののみごとくに、その熊を谷へ突きおとしたという怪力の持ち主だ。アカネは走るのがすぐくはやく、木のほりがうまい。この四人が、おれたちといっしょにいってけるとなれば、ぜったい安心だ。

おれたちは、やはり、ミコトがさいしょにきめたとおりに、裏山から海岸の密林かみりんつたいに南へいくことにした。さいごに、それをきめたのは、まじない師、ミコのうらないだ。

この村でも、ものごとをきめるときは、かならず神さまに、おうかがいをたてる。だが、おれたちの村とはちがう。おれたちの村のノロさまは、神さまがのりうつる土人形をつかって、神さまのことばをみんなにしらせるが、ミコは、神さまへのうらないには鹿の骨をつかう。うらないを

る小さな甕かまをかついだ若者たちと村人たちがつづく。おれもジロもタケルたちといっしよに、村人の中にまじって歩いた。

やがて、おれたちは丘いねの頂たかねに着いた。そこは、村を囲む堀をこえて、この村へ続く南の丘で、さらにその丘は、うっそうとした木立ちの茂る山へと続いている。丘からは、部落とその下にひろがる稲田、そして、あなたにひろがる平地や曲りくねった川が、一目でみわたせる。海もみえる。そこを、村人たちは「墓地かみち」と呼んでいる。

木立ちはまばらで、カヤが生い茂り、風にゆれて、ザワザワと音をたて、マツムシソウやフジバカマなどの秋の花が、あたりいちめん咲きそろって、コオロギが、いかにもミコの死を悲しむように、鳴きだてていた。

ミコの死体は、フジ色の、きれいな花を咲かせている、フジバカマの原へおろされた。若者たちは木グワで、その土を掘りはじめた。こどもの背たけほどの深さの穴を掘ると、いよいよ、死体を入れた大きな甕かまをうずめるばんだ。

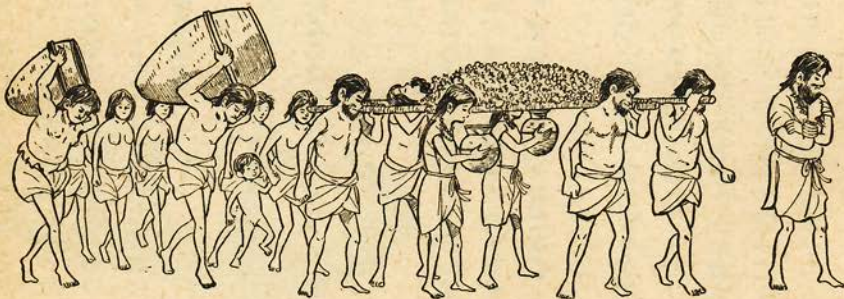
死体は両手を胸であわせ、石や貝ガラやケモノの牙をつづりあわせた首かざりや、腕かざりをつけたミコの死体は、

ノギクの花といっしよに、足さきから、しずかに甕かまの中におさまった。その甕の口へ、小さな甕かまのふたの口をあわせると、もうノロの死体はみえなくなる。

掘りあげた土が、もとおりに甕の上へかぶさり、すっかり甕はうずまった。

そして、かぶせた土の上には、大きな石の目印が置かれる。そして、炬にくべるようなマキを、その上に、どんどん積み重ねて、やがて火をつける。マキは、まっ赤な炎をあげて燃えはじめ、灰色の煙が、すみきった青空に向かって立ちのぼった。

「ミコよ、よみへいけ。





だぞ、タロ。これは、ぶじに旅ができるというしらせだ。」
村長は、うれしそうにさげんだ。おれとシロは、たがいにサギを抱き、頭をなでた。

「グァア」

やがて、サギはひと声高らかに鳴き声をあげると、羽をのばしてパッと空中に舞いあがった。

近くに舞いおりていた三羽も、つづいて舞いあがった。

四羽は、ゆっくりと、おれたちの上空をまわりはじめた。
「あの四羽は親子だ、二羽の小さなのは、この夏に生まれて、大きくなったんだぞ。」

ミコトがいった。してみると、おれたちがたすけた、あのサギは、この春のあいだに結婚して、二羽の子どもを育て、南のすみかへ帰っていくのだ。傷ついたサギだって、ああして、りっぱに旅立っていく。おれたちになんて、帰れないことはない。

おれは、からだの底から、ぐんぐん力があふれてきた。そして大空を仰ぎ、まっ青にすみきった秋空を、南をさして、小さくなっていく四羽のサギたちに向かって、いっしょようけんめい手をふった。村人も、いっせいに手をふっている。

たかし・よいち

1928年 熊本市に生まれる。

1948年 東洋語学専門学校(旧制)中国語科卒業後、
大学図書館司書、児童雑誌の編集等に従事。

住 所 埼玉県所沢市緑町 新所沢団地38-3



禁 無断上映，上演，放送，転載

著 者 たかし・よいち
発行者 小宮山量平

株式会社 理論社 發行
東京都千代田区神田神保町一の64
電話東京(三三)五六六八・五六六九
振替口座 東京 九五七三六
橋 誠 和 印 刷
本 本 製 本

一九六二年四月 第二刷
定価 三八〇円